

1 学校の状況と地域の実態

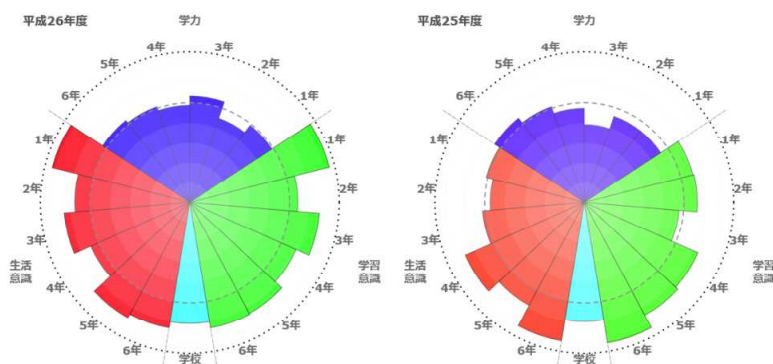
- (1) 授業研究を中心とした教員の研究・研修は定着している。子どもが主体的に課題を解決する学習を研究サブテーマに位置づけ、研究を進めていきたい。
- (2) 情緒面で配慮を要する児童、学力に課題をもつ児童が各学級に数名いる。チーム体制で個別での支援を行う必要がある。
- (3) 子どもらしく、明るく人懐っこい児童が多い。
- (4) PTA活動、学援隊やワンデーサポート、読み聞かせボランティア、園芸部などのボランティア活動が充実している。運動会やタッチングプールなどの行事の際は、保護者だけではなく、地域の方々、区スポーツ推進委員、卒業生など、多くの方々にあたたかく見守っていただいている。

2 今後3年間の方向（中期学校経営方針）

学力向上に関する指導の目標・方針（平成27年度末の姿）

本校の柱である健康教育の取組の積み重ねによる成果を踏まえながら、さらに全教科等において指導内容および方法について改善を進め、学力の向上を図っています。

3 横浜市学力学習状況調査等からの平成26年度の実態把握



- (1) 学力の概要と要因の分析
全体的に横浜市の平均値と比べて大きな差異は見られず、平均的な状況にある。前年度に比べると、全体的に確実な伸びが見られる。2年生は横浜市の平均より下回っているので、今後も日々の学習において基礎的な学力をつけ、活用力を養うことが求められる。

(2) 教科学習の状況

- 国語科；文章構成に気を付けながら読んだり、漢字などの知識・理解については、比較的高い数値となっている。低学年は話す・聞く力に、高学年は書く力に課題が見られる。
- 社会科；資料の読み取りや地図帳の活用について課題が見られるが、全般的によく理解している。
- 算数科；全学年を通じて計算する力はあるが、図形や数直線から読み取ったり、読み取ったことから考えたりすることに関する課題が見られる。
- 理科；全般的に市の平均的だが、実際に実験を行っていない学習については、技能面でも知識面でも課題が見られるが、実験を行った単元に関しては理解している。

(3) 経年変化の状況と要因の分析（学習・生活意識調査も含めて分析）

重点研究会を中心に授業力向上を目指した授業改善を行ってきたので、どの教科においても数値的な向上がみられる。学年ごとの差もなくなってきており、平均化してきた。今後も、生活意識や学習意識が高いので、その意欲を学習に結びつけられるようにした学習を進めていきたい。

4 平成27年度 目標と具体的方策

平成27年度 目標

子どもが主体的に課題を解決する学習の実現

(1) 学校組織としての共通の取組

○子どもが主体的に課題を解決するために

学習のめあてをしっかりとめさせた上で、話し合い活動が充実するような場の設定をしたり、自分の考えをしっかりと発表できるようにクラスのルールを明確にしたりすることで、主体的に課題を解決できる授業を行う。

○個に応じた指導体制の充実

5年生においては、80人を3クラスとする少人数学級を実施する。

○研究・研修体制の充実

体育科・健康教育をとりあげて研究を重ねている重点研究を核として、求められる全ての教科等における学力とその指導法についての全職員の共通理解を図った授業実践と改善できるよう、指導案検討の時間や教材開発の時間を確保する。

(2) 学年・教科等としての取組

1 学年

- 生活科等で文字だけではなく、身体表現などの様々な表現方法を大切にするとともに聞く場面をしっかりと位置付ける。

2 学年

- 体験を通して、学習できるような単元構想をする。
- 事実を根拠として考える機会を保證できる場を確保する。

3 学年

- 課題解決を充実させるために、見通しがもてるような単元構想をする。
- 思考・判断の根拠となる資料を教師が意図的に提示する授業を展開できるようにする。

4 学年

- 課題解決を充実させるために、比較・関連づけができるような学習材や資料を開発する。
- 社会科等で見学、調査したことを説明する文章を書くなど表現活動を大切にしている。

5 学年

- 課題解決を充実させるために、解決方法や多彩な表現が期待できる単元構想や学習材を開発する。
- 反対の意見を出したり、相手の考えを述べたりしながら話し合える場面を位置づける。

6 学年

- 課題解決を充実させるために、解決方法や多彩な表現が期待できる単元構想や学習材を開発する。
- 総合的な学習等で説明する文章、意見を述べる文章を書くなど、表現活動を大切にするとともに話し合う場面を位置づける。

個別支援学級

- 個別の教育支援計画・個別の指導計画に基づき、発達段階に応じた適切なコミュニケーション手段を積極的に活用する場面を設けるようにする。
- 子どもの発達段階に応じて各学年の取組を参考にした活動を行えるようにする。
- 一人ひとりの児童に応じた分かりやすい情報発信をするなど、言語環境の整備を行う。